

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第22集

波入江遺跡

なみ

いり

え

1994年12月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第22集

波入江遺跡

1994年12月

豊橋市教育委員会



例　　言

1. 本書は、豊橋市老津町字波入江において住宅地及び建物建設に伴い実施された埋蔵文化財発掘・試掘調査の報告書である。調査期間は、本調査が平成3年8月9日～9月4日で、試掘調査が平成5年8月8日である。
2. 調査は豊橋市教育委員会が行い、岩瀬彰利（当時豊橋市美術博物館学芸員）が担当した。
3. 報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、菅沼泰子、多田美香、高木優子、伊藤雅子、山本絢子、氏原久枝各氏の援助を受けた。また、写真撮影は岩瀬が行った。
4. 発掘調査に際しては事業者である（株）サン・ハウジングより調査費用等の援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本書の執筆・編集は岩瀬彰利（文化振興課文化財係）が行った。
6. 本書に使用した方位は磁北である。遺物・遺構のスケールはそれぞれに明示した。なお、写真的縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

| | |
|----------------|---|
| 1. 遺跡の立地 | 1 |
| 2. 歴史的環境 | 4 |

第2章 調査の経過

| | |
|-----------------------|---|
| 1. 調査に至る経過 | 6 |
| 2. 調査区の位置と調査の方法 | 7 |

第3章 遺構

| | |
|-----------------|----|
| 1. 壁穴住居址 | 9 |
| 2. 堀立柱建物址 | 11 |
| 3. 溝 | 13 |
| 4. その他の遺構 | 14 |

| | |
|--------------|----|
| 第4章 遺物 | 15 |
|--------------|----|

| | |
|----------------|----|
| 第5章 試掘調査 | 24 |
|----------------|----|

| | |
|---------------|----|
| 第6章 まとめ | 26 |
|---------------|----|

挿図目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 第1図 波入江遺跡位置図 (1/50,000) | 2 |
| 第2図 波入江遺跡周辺地形図 (1/3,000) | 3 |
| 第3図 波入江遺跡周辺部主要遺跡分布図 (1/10,000) | 5 |
| 第4図 調査区位置図 (1/2,500) | 7 |
| 第5図 本調査区全体図 (1/160) | 8 |
| 第6図 壴穴住居平面図・断面図 (1/50) | 10 |
| 第7図 据立柱建物址平面図・断面図-1 (1/60) | 11 |
| 第8図 据立柱建物址平面図・断面図-2 (1/60) | 12 |
| 第9図 SD-1 A-A'ライン断面図 (1/100) | 13 |
| 第10図 地床炉平面図・断面図 (1/20) | 14 |
| 第11図 出土遺物-1 (1/3) | 18 |
| 第12図 出土遺物-2 (1/3) | 19 |
| 第13図 出土遺物-3 (1/3) | 20 |
| 第14図 出土遺物-4 (1/3 + 1/2) | 21 |
| 第15図 試掘調査グリッド位置図 (1/400) | 24 |
| 第16図 試掘調査グリッド平面図・断面図 (1/50) | 24 |
| 第17図 試掘調査出土遺物 (1/3) | 25 |

表目次

| | |
|-------------|----|
| 第1表 出土遺物観察表 | 22 |
|-------------|----|

写真図版目次

| | |
|--------------------------|-------------------------|
| 図版 1-1 波入江遺跡調査区全景 (北西から) | |
| 2 SB-1 全景 (北西から) | |
| 2-1 SB-2 全景 (北から) | |
| 2 SD-1 南壁付近 (西から) | |
| 3-1 SB-1 電址 (南から) | 2 SB-2 電址 (北から) |
| 3 地床炉 (南東から) | 4 SB-1・SD-1 切合い断面 (北から) |
| 5 SB-2 須恵器出土状況 (東から) | 6 SB-2 土師器出土状況 (東から) |
| 4 出土遺物 | |



第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

波入江遺跡は豊橋市老津町字波入江に所在する遺跡である（第1図）。豊橋市は東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾にそれぞれ面するように平野部が限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身である古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面・豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の大きく3面に分けることができる。

波入江遺跡の所在する老津地区は梅田川左岸の河岸段丘・中位面にあり、西に三河湾を望む段丘上に形成された町である。この地区は旧渥美郡老津村として存在し、古くから漁業・農業で栄えた町であったが、昭和30年3月1日に豊橋市に合併し現在に至っている。

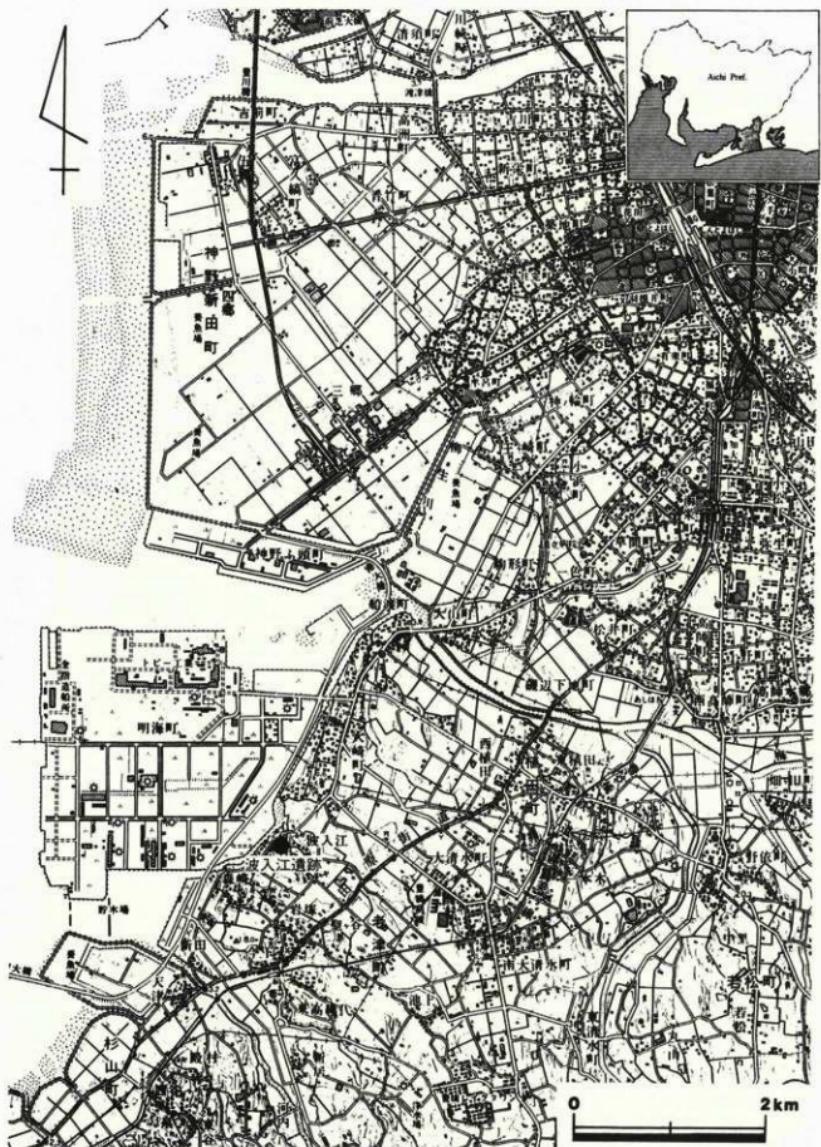
波入江遺跡は台地北西端部の標高14mを頂点とし、北西の方向に緩やかに傾斜する標高6～10m前後の台地斜面部に位置している。この河岸段丘・中位面は末端付近で標高15m前後を測り、西は三河湾で浸食され、段丘自体も小河川によって開析が進んでいる。この台地は酸性土壌であり、愛知県の天然記念物に指定されている木の根に酸化鉄が付着したいわゆる“高師小僧”も僅かだが出土している。

遺跡周辺は現在は埋め立てられているが、字名が示すように古墳時代は入江になっており、大崎町が所在する段丘と老津町が所在する段丘間は海が入り込んでいた。更に遺跡前面は小規模な入江状を呈している。今回の波入江遺跡の調査で検出された住居址は台地の斜面に所在している。このような立地は、自然環境の変化に十分対応できる場所が選ばれているといえる。すなわち、この地方に冬場に強く吹く「本宮おろし」と呼ばれる北西季節風に対し、台地上なら直接海からの風を受けてしまうが、斜面に所在しているために台地自体が風よけになり、直接北西季節風を受けずにすむという利点がある。三河湾からの津波等の高潮も台地自体が堤防の役割を果たすために災害を防御できるといえよう。

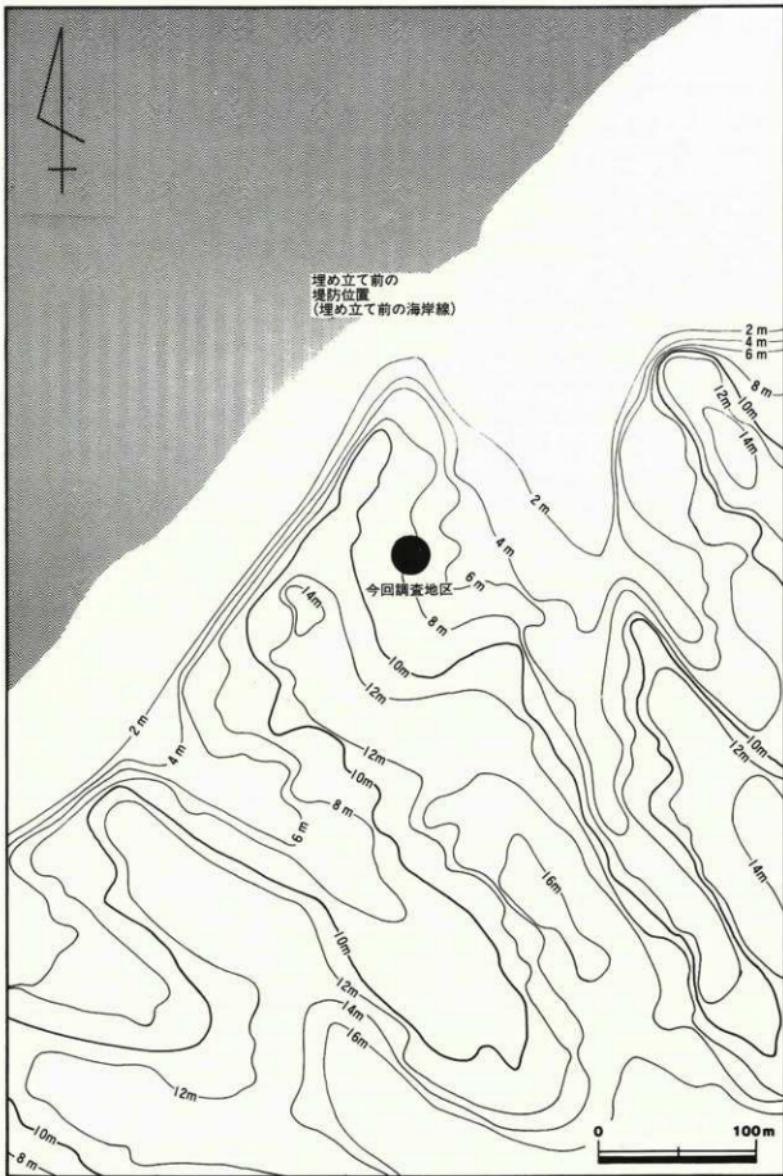
一方生活面では、入江になっているため船等の発着に便利であり、海上交通及び漁業にむいているといえる。このように、災害面と交通・生活面において遺跡の立地条件は良好なものであったといえよう。

参考文献

- 豊橋市史編集委員会 「豊橋市史」第1巻 1973
豊橋市教育委員会 「豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 水神古窯」 1987
豊橋市教育委員会 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集 桜遺跡試掘調査報告書」 1989
豊橋市教育委員会 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡」 1990



第1圖 渡入江遺跡位置圖 (1/50,000)



第2図 波入江遺跡周辺地形図 (1/3,000)

2. 歴史的環境

波入江遺跡の所在する老津地区は遺跡の多い地域であり、伊藤恵氏によって詳細な遺跡の分布が確認されている（註1）。また波入江遺跡も伊藤氏によって隣接した場所が発掘調査されており、報告もなされている（註2）。このため、ここでは老津地区の主要な遺跡の概要を紹介する。

縄文・弥生時代では、遺物としては土器・石鎌等が各地区で採集されているが、大きな遺跡は確認されていない。しかし、遺物が採集されていることから当地区にも縄文・弥生時代の遺跡が存在している可能性は高いといえる。

古墳時代は、集落址では今回調査した波入江遺跡がある。古墳は紙田川流域で多く所在しており、妙見古墳（14）、宮脇古墳群（9～12）、今下神明社古墳（13）等がみつかっている。

妙見古墳は測量調査（註3）が行われており、全長49mの前方後円墳であることが確認されている。墳丘は2段築成で築造は古墳時代後期と考えられるが、出土遺物がないことや横穴式石室の形態が不明であるため明確ではない。なお、妙見古墳はこの地域の首長墳であるものと推定される。

宮脇古墳群は老津神社周辺に分布しており、このうち1号墳の発掘が行われ、報告（註1）もされている。その結果、1号墳は6世紀末から7世紀初頭の直径14mの円墳であることが判明し、南西に開口する横穴式石室を有していた。そして玄室の奥壁前には組合式石棺が据え置かれていた。出土遺物には、圭頭大刀、耳環、鉄鎌、ガラス玉、須恵器等がある。

今下神明社古墳は現在では滅失しているが、金銅装の杏葉等の馬具類や耳環、須恵器等の遺物が出土している。

古代以降では、この地区は古窯址と城址が多くみられる。集落址には東中尾遺跡（5）等が知られている。また集落址に伴うと思われる中世頃の貝層がこの地区的各地に散布している。

古窯址では、波入江古窯址（3）、西中尾古窯址（4）、山ノ神古窯址（6）、大津中古窯址（8）等が存在している。これらの古窯址は中世陶器を焼いた窯であるが、調査されていないため詳細は不明な点が多い。

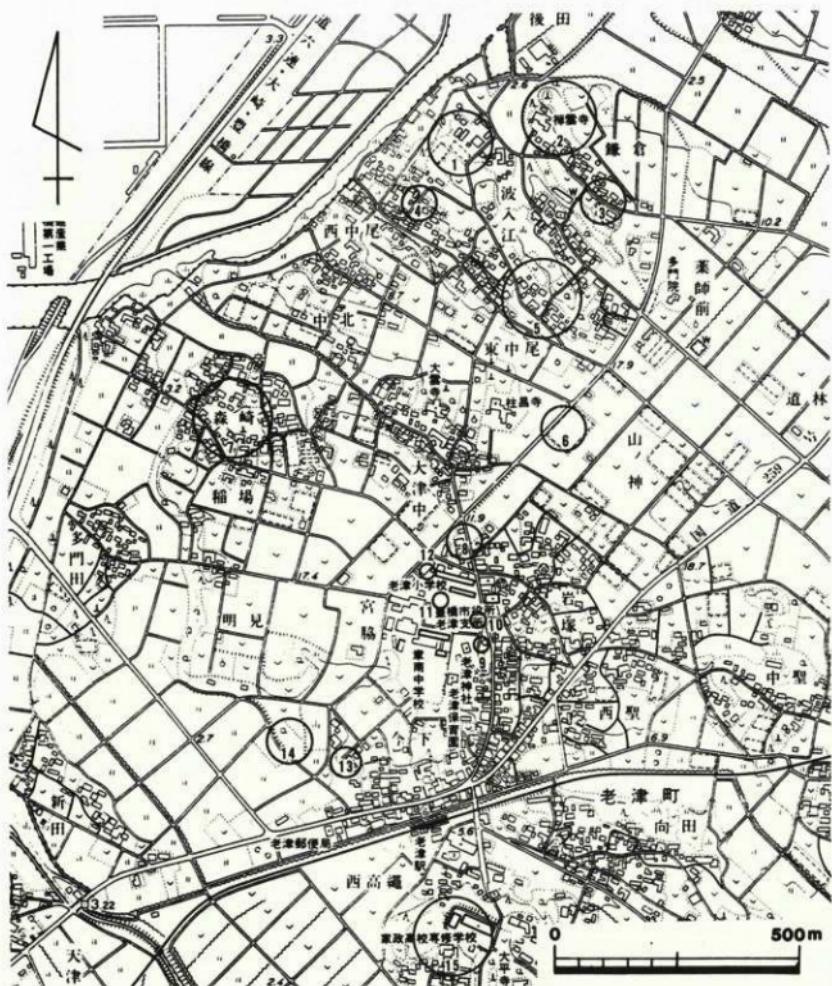
城址では、戸田氏の支城である波入江城址（2）、北裏城址（7）、高繩城址（15）が知られている。波入江城址・北裏城址は遺構が残っておらず、現在は寺院や宅地になっている。

高繩城址は現在は豊橋市立家政高等専修学校の敷地になっているが、僅かに土壘・空堀が残っている。また広島県の浅野文庫には『大津古城（高繩城）図』が残され、当時の繩張りが推定されている。

註1 豊橋市老津小学校 「郷土誌 老津」 1990

註2 伊藤氏の調査地点の報告では、波入江203貝塚の名称で報告（註1）されている。

註3 豊橋市教育委員会 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第17集 古墳測量調査（I）」 1993



- | | | |
|-------------|-----------|-----------|
| 1. 波入江遺跡 | 2. 波入江城址 | 1. 波入江古窯址 |
| 4. 西中尾古窯址 | 5. 東中尾遺跡 | 6. 山ノ神古窯址 |
| 7. 北裏城址 | 8. 大津中古窯址 | 9. 宮脇1号墳 |
| 10. 宮脇2号墳 | 11. 宮脇3号墳 | 12. 宮脇4号墳 |
| 13. 今下神明社古墳 | 14. 妙見古墳 | 15. 高綱城址 |

第3図 波入江遺跡周辺部主要遺跡分布図 (1/10,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

平成3年7月に(株)サン・ハウジングより、豊橋市老津町字波入江123に所在した豚舎を撤去し分譲住宅として宅地造成する計画がたてられ、建築確認申請の合議が教育委員会文化課(当時)に提出された。教育委員会では、現地が波入江遺跡(註1)の範囲に含まれる可能性が高いことから、当教育委員会と事業者の(株)サン・ハウジングの2者で協議し、試掘調査を行い埋蔵文化財の所在の有無を事前に確認することに決定した。

試掘調査は8月7日に事業者から重機の提供を受け2日で行った。調査グリッドは対象地内の3ヶ所に設定した。調査の結果、台地上は豚舎によって既に削平されていたが、斜面部分に設定した2ヶ所より焼土、土壤等の遺構と中世陶器等の遺物が出土し、該当地が遺跡であることが確定した。

この結果をふまえて市教委と事業者で再協議し、削平部分を除く遺跡の良好に残っている部分600m²について事業者の調査費負担で発掘調査を行うことで合意した。本調査は平成3年8月9日～9月4日にかけて行った。調査期間中に台風等により調査区が水没する事態が生じ、調査区壁が崩落する被害があった。このため、崩落した部分については一部調査が行えなかった。調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居2軒と時期不明の掘立柱建物及び大きな溝等が検出された。なお、現地は調査終了後宅地に造成され、既に家も建てられている。

続いて平成5年6月24日に老津町の松井義次氏より豊橋市老津町字西中尾492に約500m²程の小規模な工場を建てる計画で、建築確認申請の合議が教育委員会文化振興課に提出された。教育委員会では、現地が前回調査した波入江遺跡に隣接することから、該当地が遺跡である可能性が高いと判断した。このため、市教委と工事請負業者の丸昇彦坂建設株式会社の2者で協議し、試掘調査を行い埋蔵文化財の所在の有無を確認することに決定した。

試掘調査は平成5年7月7日に行った。調査は建物建設予定地内に3ヶ所のグリッドを設定し遺構の有無の確認を行った。調査の結果、前回調査時に検出した大きな溝が該当地に通っていることが確認され、グリッドからは、中世陶器の他に製塙土器も出土した。また、最大で厚さ1m程の盛土がされていることも判明した。

この試掘調査の結果を基に愛知県教委と市教委で検討した結果、工場建設予定地は都市計画道路線に指定されており恒久的な建物は法的に建てられず、工場が道路造成までの暫定的な簡易プレハブという点から、現地を更に盛土し掘削は盛土内で納めるように設計変更すれば着工を認める方針で指導した。この回答を受けて事業者側は指導通りの工法に変更したため建築を許可した。そして基礎部分掘削時の平成5年8月8日に立会調査を行い、県教委宛に立会調査表を提出し調査を終了した。

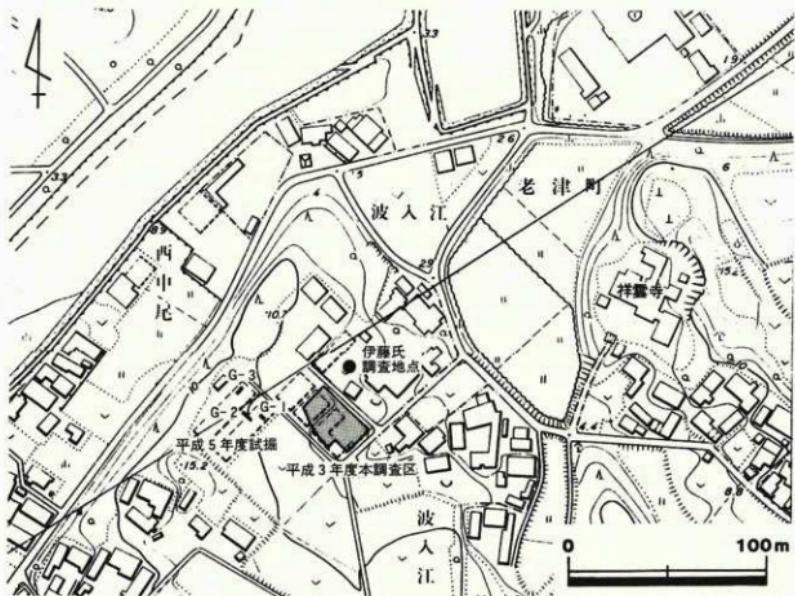
註1 豊橋市教育委員会では従来まで当遺跡名を波入江貝塚としていたが、当遺跡には平安時代の貝層が僅かにみられるのみであるため、波入江遺跡と改称した。

2. 調査区の位置と調査の方法

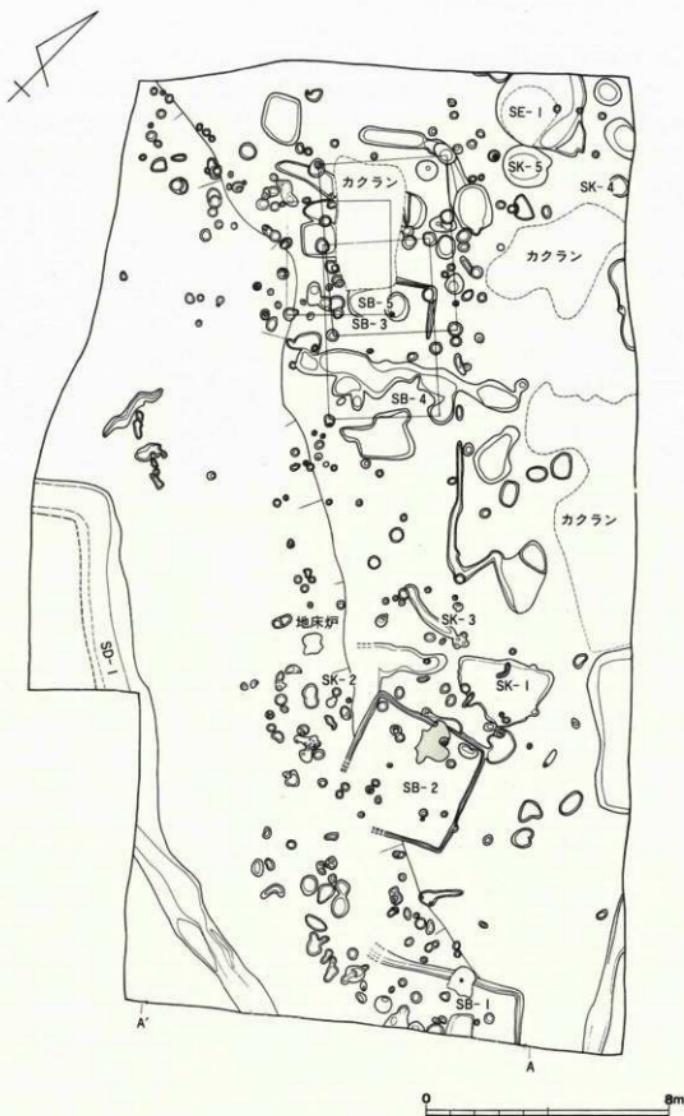
調査は平成3年度の本調査600m²と平成5年度の試掘調査3ヶ所で行っており、位置は第4図の通りである。ちなみに、伊藤氏が平成元年に調査した地点は本調査区より北東に20m程の位置である。本調査を行うに当たって、工事等の基準点がないため並行する道路に任意の基準点を設定し、10m×10mのグリッドを基本にして調査区の区割りを設定し、表土等の遺物はグリッド単位で取り上げている。一方試掘調査は該当地内の任意の地点にグリッドを設定して掘り下げている。

本調査の基本的な手順は次のように行った。

1. 調査区を設定し、調査区の地区割を行う。
2. 表土層を重機で除去し、遺構面（地山面）を検出する。
3. 人力で地山面を更に精査して遺構を検出し、必要に応じてベルトを残しながら遺構を掘り下げる。
4. 竪穴住居址等主要遺構より出土した遺物は、出土位置及びレベル高を記録して番号を付けて取り上げる。
5. 全体図や個々の遺構図、出土状況図を作成する。
6. 全体写真や遺構写真、出土状況写真を撮影して調査を終了した。



第4図 調査区位置図 (1/2,500)



第5図 本査区全体図 (1/160)

第3章 遺構

今回の調査では竪穴住居址、掘立柱建物址、溝、井戸、土壙等の遺構が検出されている（第5図）。ここでは各遺構を種類毎に説明し、土壙に関しては遺物の出土したものを中心記載する。記載にあたって竪穴住居址・掘立柱建物址はSB、溝はSD、井戸はSE、土壙はSKとそれぞれ表記する。なお、SB-1・2は竪穴住居址、SB-3～5は掘立柱建物址であり、規模等の数値は検出面で測った数値である。

1. 竪穴住居址

SB-1（第6図1）

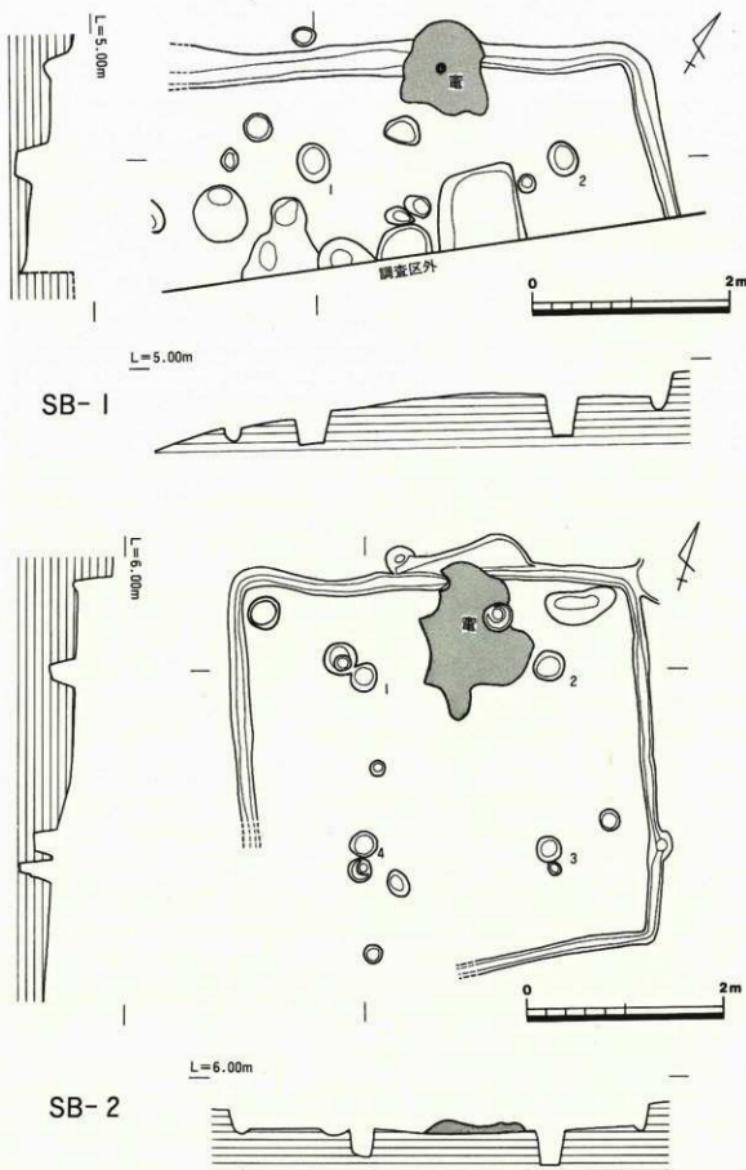
SB-1は約5.2m×2.4m以上の竪穴住居址であり、住居址の南半分は調査区外で完掘されていないが、平面形は方形もしくは長方形をなすものと思われる。主軸方位はN-32°-Eを測る。住居址の壁際には幅約25cm、床面からの深さが約10cmの壁溝が巡らされており、床面は地山面から約12cmの深さで掘り込まれている。柱穴は2ヶ所確認され、柱間は2.48mを測る。柱穴No.1は直径38cmの円形を呈し、床面からの深さは51cmを測る。柱穴No.2は直径32cmの円形を呈し、床面からの深さは49cmを測る。

住居址の北辺中央部では竈が検出され、約88cm×96cmの範囲で焼土が確認されている。竈は北辺部より20cm程張り出し、上部が壊されていたが床面より約26cmの高さまで残り、中央に土製支脚（第11図3）が残存していた。竈付近には貯蔵穴と思われる土壙がみられる。遺物は須恵器・坏身や土師器・甌が出土している。

SB-2（第6図2）

SB-2は4.24m×4.12mの竪穴住居址であり、南西角部は確認できなかったが、平面形は方形をなすものと思われる。主軸方位はN-18°-Eを測る。住居址の壁際には幅約20cm、床面からの深さが約6cmの壁溝が巡らされており、床面は地山面から約24cmの深さで掘り込まれている。柱穴は4ヵ所で確認され、各コーナーの内側に配置されている。柱穴No.1は直径24cmの円形で、床面からの深さは28cm、柱穴No.2は直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは34cm、柱穴No.3は直径24cmの円形で、床面からの深さは25cm、柱穴No.4は直径28cmの円形で、床面からの深さは21cmを測る。柱間はNo.1-2間が1.84cm、No.2-3間が1.84cm、No.3-4間が1.88cm、No.4-1間が1.76cmである。

住居址の北辺中央部で、竈が検出され、約1.6m×1.08mの範囲で焼土が確認されている。竈は北辺部より12cm張り出しているが、大半は壊され残りは良くない。北辺中央竈部分に地山面より約13cm掘り込んだ浅いテラス状のものが最大幅32cmで張り出している。遺物は須恵器（甌・高环・壺・甕）、土師器（甌・甕）が出土している。



第6図 穴穴住居址平面図・断面図 (1/50)

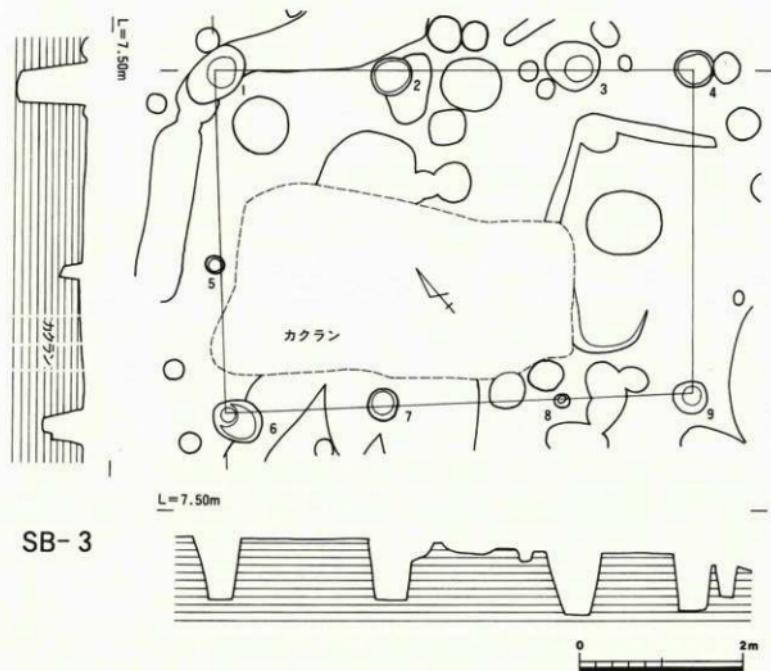
2. 掘立柱建物址

SB-3 (第7図)

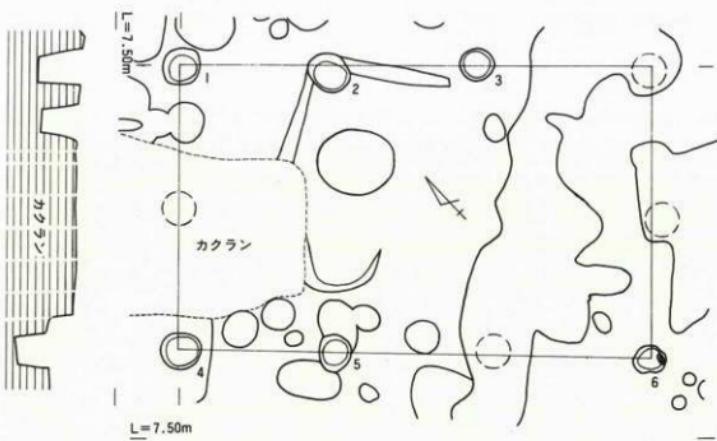
SB-3は2間×3間の建物になるものと思われる。桁行は柱穴No.1-4が5.76m、柱穴No.6-9が5.72mをそれぞれ測る。各柱間の長さはNo.1-2が2.12m、No.2-3が2.24m、No.3-4が1.40m、No.6-7が1.92m、No.7-8が2.20m、No.8-9が1.60mである。梁間は柱穴No.1-6が4.16m、柱穴No.4-9が3.96mを測る。各柱間の長さは、No.1-5が2.32m、No.5-6が1.84m、No.4-9間の柱穴は確認できなかった。柱穴は平均約50cmの円形をなすが、柱穴No.5とNo.8は直径20cm程度の小さい穴であった。遺物は柱穴No.2より銅錢（洪武通宝）が出土しており、建物自体は1368年以降のものである。

SB-4 (第8図)

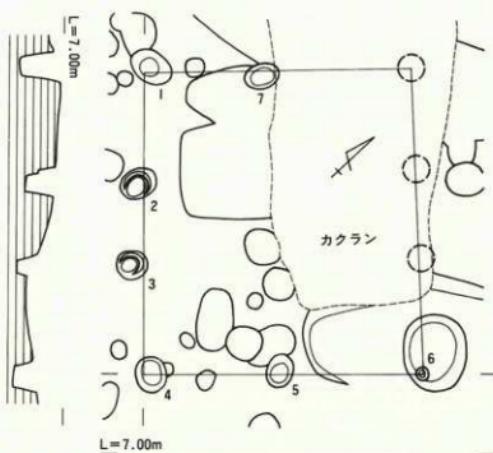
SB-4は2間×3間の建物になるものと思われる。桁行は柱穴No.1-3が3.72m、柱穴No.4-6が5.84mをそれぞれ測る。各柱間の長さはNo.1-2が1.84m、No.2-3が1.84m、No.4-5が1.88m、No.5-6が3.96mである。梁間は柱穴No.1-4が3.48mを測る。建物柱穴の一部はカクラン及び



第7図 掘立柱建物址平面図・断面図-1 (1/60)



SB- 4



SB- 5



第8図 据立柱建物址平面図・断面図-2 (1/60)

他の土壤に壊されており確認されなかった。柱穴は平均約50cmの円形をなしている。遺物は出土していない。

S B - 5 (第 8 図)

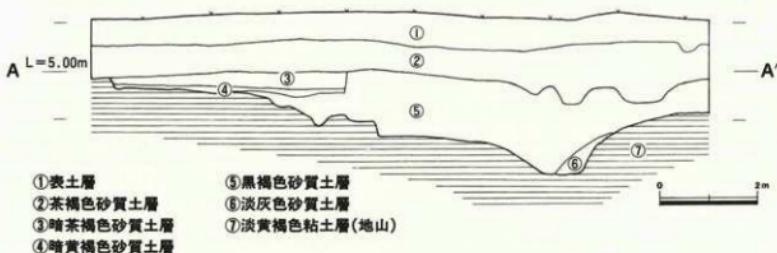
S B - 5 は 2 間 × 3 間の建物になるものと思われる。桁行は柱穴 No. 1 - 4 が 3.8m を測る。各柱間の長さは No. 1 - 2 が 1.4m、No. 2 - 3 が 1.0m、No. 3 - 4 が 1.4m である。梁間は柱穴 No. 4 - 6 は 3.4m を測る。各柱間の長さは No. 1 - 7 が 1.6m、No. 4 - 5 が 1.8m、建物柱穴の一部はカクラン及び他の土壤に壊されてしまい確認されなかった。柱穴は平均 40cm の円形をなしている。遺物は出土していない。

3. 溝

S D - 1 (第 5 ・ 9 図)

S D - 1 は一応溝と考えたが、人為的かまたは自然な落ち込み（谷地形）かの判断は困難である。規模は幅約 10m 以上、深さ約 2 m で、傾斜角 12° の落ち込みが確認されている。落ち込みの底部には更に幅 1.24m、深さ 0.65m の溝が掘り込まれている。この溝は一度埋まった後に更に掘り直しがされていた（第 9 図）。調査区で確認された溝は北西の方向に伸び、調査区西側付近で西に折れている。検出できた長さは約 20m である。

溝内に堆積した埋土の基本層序は 2 層であった。淡灰色砂質土層⑥は溝内に最初に堆積した埋土である。遺物は出土していない。この層を切るようにはば同位置に掘り直しがされている。この埋土は黒褐色砂質土層⑤で、溝及び上部の落込みまで堆積している。この層からは遺物としては繩文土器が若干出土しているのみで、無遺物層に近い状態である。厚さは溝底から最大 1.9m を測り、落込みの中のみ堆積している。この層には S B - 1 や土壤等の遺構が掘り込まれており、切り合い関係より、古墳時代後期以前に埋没したことがわかる。これより上層は包含層の茶褐色砂質土層②が厚さ 60cm 程堆積しており、その上層には表土層（厚さ約 70cm）が堆積している。



第 9 図 SD - 1 A - A' ライン断面図 (1/100)

4. その他の遺構

前記した以外の遺構では井戸（S E）、土壤（S K）と地床炉がみられる。これらのうち、遺物の出土した遺構のみについて述べる。

S E - 1 (第5図)

直径2.96m程の円形になるものと思われ、深さ25cm付近がテラスを形成し、更にそこから径1.86cmの円形で掘られている。最下部までは完掘していないが、形状・規模等から井戸と判断した。埋土は茶褐色砂質土層で、中から常滑焼・壺（第11図15）、内耳鍋（第12図18・19）、土師器・皿（第11図16・17）等が出土しており、15世紀後半～16世紀前半頃のものと推定される。

S K - 1 (第5図)

長径3.08cm、短径2.16cmの不定形をなし、深さは12cmを測る。須恵器の坏身（第12図20）が出土している。

S K - 2 (第5図)

径28cmの円形をなし、深さは33cmを測る。製塙土器の脚部（第12図21）が出土している。

S K - 3 (第5図)

長径232cm、短径36cmの帯状をなし、深さは5cmを測る。土師器・皿（第12図22）が出土している。

S K - 4 (第5図)

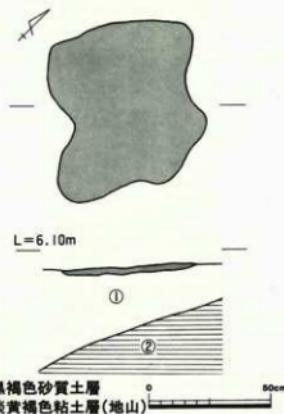
径64cmの円形をなし、深さは10cmを測る。天目茶碗（第12図23）が出土している。

S K - 5 (第5図)

長径166cm、短径140cmの楕円形をなし、深さは29cmを測る。常滑の片口鉢（第12図24）と陶器の底底部（第12図25）が出土している。

地床炉（第10図）

地床炉は S D - 1 の埋土（黒褐色砂質土層①）上で検出された。焼土の分布範囲の平面形はいわゆる分銅形に近く、規模は長径86cm、短径51cm、厚さ3cmを測る。検出面の標高は6.02m～6.07mである。遺物は焼面から土師器が出土している。



第10図 地床炉平面図・断面図 (1/20)

第4章 遺物

出土した遺物は、コンテナ2箱程と量は少ないが、大半は造構に伴うものであった。ここでは出土遺物を造構毎に分け、堅穴住居址（S B）、溝（S D）、土壙（S K）、表土・カクランの順番で説明する。

S B - 1 (第11図1~3)

1は須恵器の壺身である。立ち上がりは短く、斜め上方に直線的に伸び、口縁端部はやや尖りぎみに丸く仕上げている。底部は逆台形状で比較的平坦に作られ、約1/3程に回転ヘラケズリが施される。底部外面にはヘラ記号が認められる。

2は土師器の壺である。把手部分を欠損しているが、口径22cm程のバケツ形をしている。調整は内外面ともに板ナデであるが、粗雑に作られているため輪積痕が明瞭に残存する。

3は竈内より出土した土製支脚である。底部付近を欠損しているが円錐形をなし、断面は円形に近い。外面は板や指による押圧整形によって凹凸が著しい。

S B - 2 (第11図4~11)

4は須恵器の壺である。口縁部と底部を欠損し体部のみが残存している。体部は肩が張り、肩部には2条の沈線が施されている。体部下半には静止ヘラケズリが施されている。なお、注口部は欠損のため図化できなかった。

5は須恵器の高壺である。脚部を欠損して壺部のみである。壺部は緩やかに内湾し、皿状をなし、口縁端部は僅かにナデ曲げられている。焼成は不良で、生焼けに近い状態である。

6は須恵器の壺である。口縁部と体部以下を欠損し、肩部のみが残存している。肩部から体部は球状に近く丸い。外面はロクロナデで調整されている。

7は須恵器の壺である。口縁部のみで以下は欠損している。口縁部は外反し、口縁端部は折り曲げられている。

8~11は土師器の瓶・壺である。8は壺の口縁部破片と思われ、外方にやや開く口縁部の端部は折り曲げられやや肥厚させられている。調整は外面はナデとハケメ、内面はハケメである。9は壺の口縁部破片である。口縁部は強く外反するが、端部は若干内側にナデ曲げられる。調整は内外面ナデである。10・11は壺の底部、恐らく長胴壺になるものと思われる。10は平底であるが若干底が凹み、11は平底である。調整は10は外面ハケメ、内面ナデであるのに対し、11は外面ナデとユビオサエ、内面はハケメである。

S D - 1 (第11図12~14)

12~14は縄文土器の口縁部及び胴部破片であり、溝の底部付近より出土した。12は口縁部で、端部は丸い。これらの土器片は全て無文土器であったが、調整は摩滅のため不明である。

S E - 1 (第12図15~19)

15は常滑焼の壺の肩・体部である。肩部は球状に膨らみ、頸部は垂直気味に立ち上がるようである。調整は外面はナデで自然釉付着、内面はナデ、内面頸部付近はユビオサエが目立つ。

16・17は手捏ねの土師器の小皿である。調整は外面ユビオサエ、内面はナデである。

18・19は土師器の鍋である。18はいわゆるくの字状口縁の内耳鍋で、口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメで底部付近はケズリ、体部内面は板ナデである。19は半球形の内耳鍋で、外面はナデ調整で一部ユビオサエ、内面は板ナデである。外面の体部中位に一条の沈線を巡らしている。

S K - 1 (第12図20)

20は須恵器の壺身である。立ち上がりは短く、斜め上方に僅かに外反して伸び、口縁端部はやや尖りぎみに丸く仕上げている。底部は逆台形状で比較的平坦に作られ、約1/3程に回転ヘラケズリが施される。底部外面にはヘラ記号が認められる。

S K - 2 (第12図21)

21は製塙土器の脚部破片と思われる。先端部と上部を欠損しているが、径8mm程の円形で、残存長は3cmを測る。

S K - 3 (第12図22)

22は土師器の小皿である。調整は外面ユビオサエ、内面はナデであるが一部ユビオサエがみられる。

S K - 4 (第12図23)

23はいわゆる天目茶碗の破片である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部付近で若干外側に曲げられている。底部は欠損していて不明である。全体に鉄釉が施されている。

S K - 5 (第12図24~25)

24は常滑焼の片口鉢である。外方に直線的に広がる器形で、口縁端部には櫛状工具による沈線が巡らされている。調整は内外面ともナデで、外面にはユビオサエが目立つ。

25は中世陶器の壺である。体部半部を欠損している。底部は平底で、体部は底部より膨らみながら広がっている。調整は内外面ロクロナデでユビオサエが目立ち、底部は未調整である。

S B - 3・柱穴N_o 2 (第12図26)

26は銅錢である。洪武通宝であるが、びた銭と思われる。

表土・カクラン (第12図27~31、第13図、第14図)

27~29は須恵器の壺身である。27は底部は平坦で、断面台形の高台が付く。口縁部は欠損して不明である。口縁部及び底部内面はロクロナデ、底部外面は回転ヘラケズリである。28は口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部は丸い。底部は欠損して不明である。調整は口縁部はロクロナデである。29は底部はやや膨らみ、やや外方にナデ曲げられた高台が付く。口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部はやや尖り気味である。口縁部及び底部内面はロクロナデ、底部外面は回転ヘラケズリである。

30・31は須恵器の壺蓋である。30は天井部が笠状になり、端部は下方に屈曲し丸いがやや外反する。つまみ部はいわゆる宝珠つまみである。天井部外面の1/2は回転ヘラケズリ、これ以外はロクロナ

テ調整である。31は天井部が笠状になり、端部は下方に屈曲し丸くおさめる。天井部は欠損して不明である。調整はロクロナデである。

32は須恵器の壺である。口縁部は大きく外傾し、端部はナデ窪む。口縁中央に2条の沈線が施されている。内外面ともにロクロナデによる調整である。

33・34は灰釉陶器の碗である。33は器形は口縁部が緩やかに内湾し、端部付近でやや外方に開き、高台はいわゆる三日月高台である。調整は内外面ロクロナデ、底部は糸切り未調整であるが、口縁部付近は板によるナデが行われている。34は口縁部は欠損しているが、体部は緩やかに内湾し高台はいわゆる三日月高台である。調整は内外面ロクロナデ、底部は糸切り未調整である。

35~47は中世陶器の碗である。34・35は器形は口縁部が緩やかに内湾し、端部付近でやや外方に開き高台はやや外反し接地面は丸い。調整は内外面ロクロナデ、底部は糸切りである。37・38は口縁部のみで底部を欠損している。口縁部は緩やかに内湾し、端部付近でやや外方に開く。調整は内外面ロクロナデである。39~47は底部のみの破片で、47は無高台、それ以外は有高台である。高台はやや外反し接地面が平らなもの（39~42）、やや外反し接地面が丸いもの（43~46）、無高台（47）に分かれる。40の高台には砂痕が、42の高台にはモミ痕がみられる。底部は全て糸切りである。

48は古瀬戸の壺と思われる。肩部より上を欠損している。肩部に沈線が巡らされ、外面には灰釉が掛かっている。調整は内外面ともロクロナデであるが、底は欠損しており不明である。

49は古瀬戸の鉢である。口縁部は直線的に底部より外傾しながら伸び、口縁端部内面に突帯を巡らし、蓋と合わせ易いように工夫されている。内面底部には櫛によって目立てが行われている。底部は糸切りが行われている。

50は近世陶器の蓋である。器形は、天井部は偏平で内側に緩やかに内湾している。口縁内面には1条の沈線が施されている。調整は天井部はケズリで、内外面はロクロナデである。

51は常滑焼の壺である。口縁部破片で口縁部は内傾し、端部は折り返して縁帯をなしている。

52は壺の破片と思われ、外面には叩きによる文様がみられる。

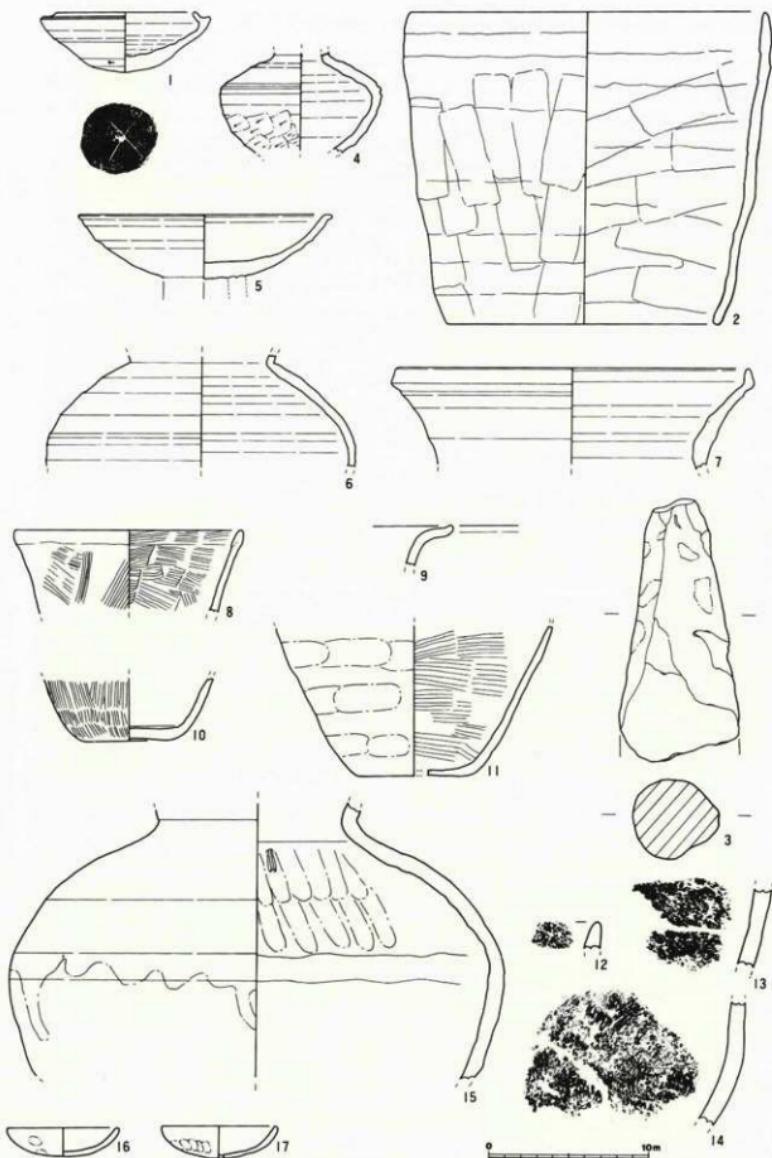
53は土師器の壺の頸部破片である。口縁部は外反して広がるようであり、体部もかなり張る器形になるものと思われる。調整は内外面ハケメである。

54~56は土師器の壺である。54は口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部付近で屈折し外傾している。口縁端部は尖り気味である。調整は外面ナデで一部ユビオサエ、内面は端部付近はナデで、その下は板ナデである。55は口縁部は直に立ち上がり、端部付近で僅かに外反する。口端部は肥厚され、口唇面はナデ窪みが見られる。調整は内外面ナデである。56は口縁部は直に立ち上がり、端部付近で屈曲し折れる。口縁端部は丸い。調整は外面ナデ、内面板ナデである。

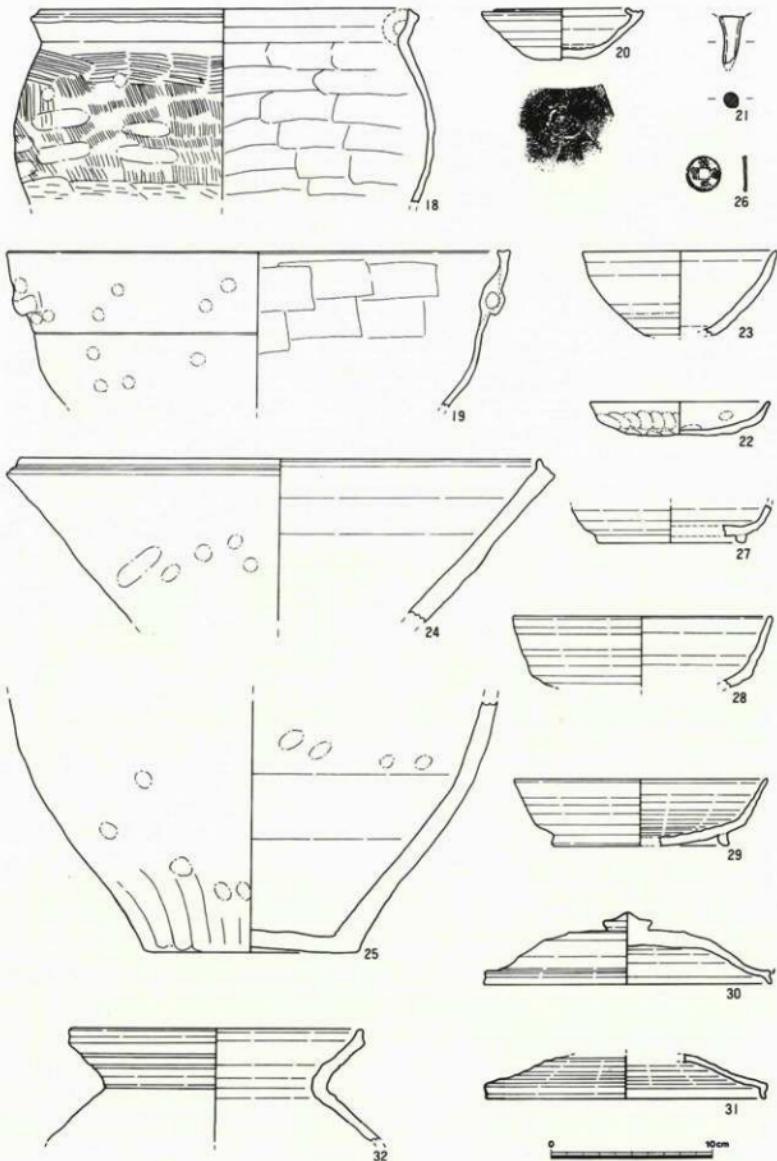
57は土師器のくの字状口縁内耳鍋である。器形は頸部で屈曲し、体部で膨らむ。調整は外面ナデで一部ユビオサエ、内面はハケメである。

58~60は土師器の小皿である。調整は内面ナデ、外面はユビオサエ（58・60）である。59は体部に穿孔が見られる。

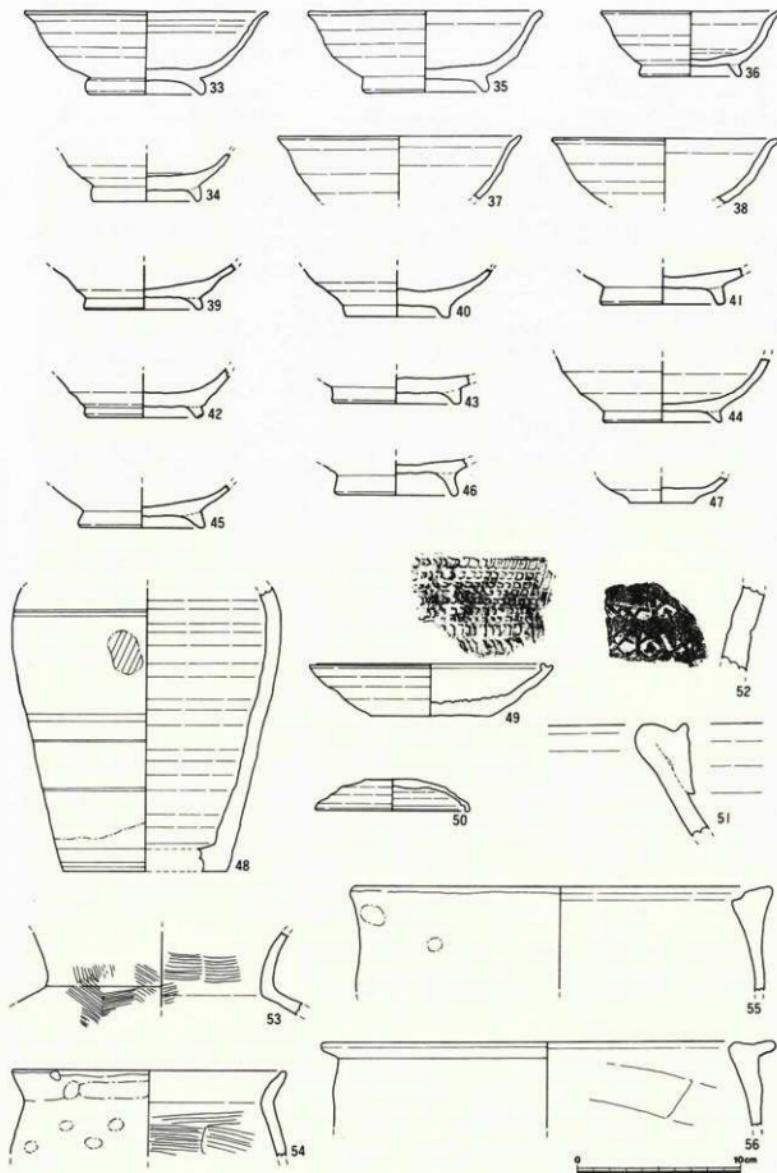
61は丸瓦である。凸面はナデられ、凹面には布目圧痕がみられる。瓦の厚さは1.8cmと厚く、端面は面をもち、面部分はナデられている。



第11図 出土遺物-1 (1 / 3)



第12図 出土遺物-2 (1/3)



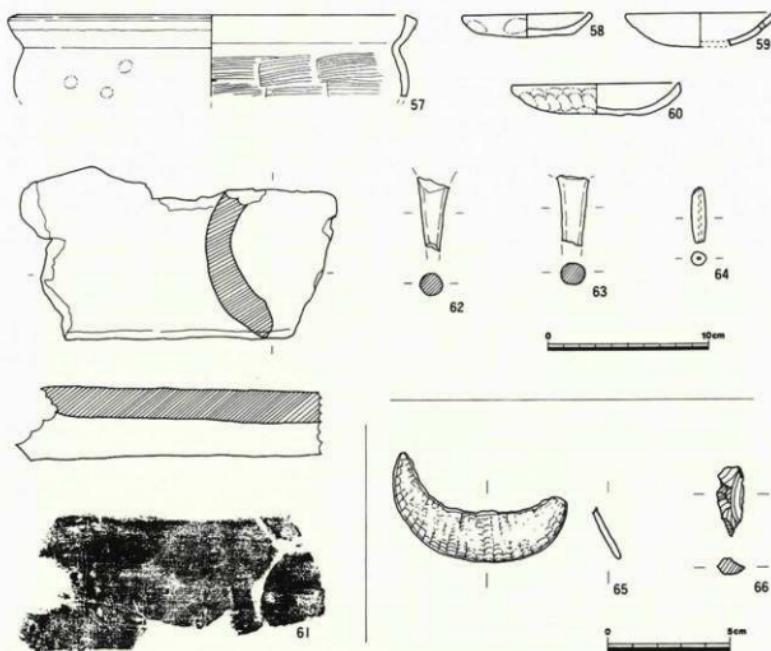
第13図 出土遺物－3 (1 / 3)

62・63は製塩土器である。製塩土器は脚部のみで、先端部は欠損している。調整は外面はナデられ、丁寧に整形されている。

64は土鍤である。長さ3.4cm、径0.9cm、孔径0.2cmで、先端部を僅かに欠損している。外面はナデによって調整されている。

65は貝輪の未製品と思われるものである。貝はベンケイガイで、殻頭部を欠損している。割れ口に調整は施されていない。

66は剥片である。長さ2.9cm、最大幅1.1cm、厚さ0.7cm、重さ2.1gで、二次調整は殆どみられず、使用痕も認められない。石材は黒曜石である。



第14図 出土遺物-4 (1/3+1/2)

第1表 出土遺物観察表

| 遺物No. | 層位・遺構 | 種類・器種 | 口径 | 器高 | 底径等 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整等 | 備考 |
|-------|---------|--------|-------------|--------|--------|-----|----|------|--------------|----|
| 11-1 | S B - 1 | 須恵器・环身 | 10.6 | 3.7 | | 密 | 良好 | 青灰色 | 内外面ナデ、底ヘラケズリ | |
| 2 | S B - 1 | 土師器・瓶 | 22.2 | 19.4 | 17.0 | 密 | 良 | 赤褐色 | 板ナデ | |
| 3 | S B - 1 | 土製支脚 | | (16.3) | [7.5] | 密 | 良 | 淡赤褐色 | 板・ユビオサエ | |
| 4 | S B - 2 | 須恵器・甕 | | (6.3) | [10] | 密 | 良好 | 明灰色 | ロクロナデ、ケズリ | |
| 5 | S B - 2 | 須恵器・高坪 | 15.8 | (4.0) | | 密 | 不良 | 灰色 | ロクロナデ | |
| 6 | S B - 2 | 須恵器・壺 | | (7.0) | [19.4] | 密 | 良好 | 暗茶灰色 | ロクロナデ | |
| 7 | S B - 2 | 須恵器・甕 | 22.0 | (6.0) | | 密 | 良好 | 暗灰色 | ロクロナデ | |
| 8 | S B - 2 | 土師器・瓶 | 14.0 | (4.9) | | 密 | 良好 | 暗褐色 | ハケメ | |
| 9 | S B - 2 | 土師器・甕 | | (2.5) | | 密 | 良好 | 暗褐色 | ナデ | |
| 10 | S B - 2 | 土師器・甕 | | (3.9) | 5.2 | 密 | 良好 | 暗褐色 | 外面ハケメ、内面ナデ | |
| 11 | S B - 2 | 土師器・甕 | | (9.3) | 7.0 | 密 | 良好 | 暗褐色 | 外面ナデ、内面ハケメ | |
| 12 | S D - 1 | 縄文土器 | | | | やや粗 | 良 | 暗茶褐色 | ナデか? | |
| 13 | S D - 1 | 縄文土器 | | | | やや粗 | 良 | 暗茶褐色 | ケズリか? | |
| 14 | S D - 1 | 縄文土器 | | | | やや粗 | 良 | 暗茶褐色 | ケズリか? | |
| 15 | S E - 1 | 常滑焼・壺 | | (16.6) | [31] | やや密 | 良 | 明灰色 | 灰釉、ユビオサエ | |
| 16 | S E - 1 | 土師器・小皿 | 7.0 | 1.8 | | 密 | 良 | 淡黄白色 | 外面ユビオサエ、内面ナデ | |
| 17 | S E - 1 | 土師器・小皿 | 7.2 | 2.0 | | 密 | 良好 | 淡黄白色 | 外面ユビオサエ、内面ナデ | |
| 12-18 | S E - 1 | 土師器・鍋 | 22.8 | (12.0) | | 密 | 良 | 淡褐色 | 外面ハケメ、内面板ナデ | |
| 19 | S E - 1 | 土師器・鍋 | 31.0 | (9.6) | | 密 | 良好 | 淡黄褐色 | 外面ナデ、内面板ナデ | |
| 20 | S K - 1 | 須恵器・环身 | 10.0 | 3.1 | | 密 | 良好 | 淡灰色 | 内外面ナデ、底ヘラケズリ | |
| 21 | S K - 2 | 製塙土器 | | (2.9) | [1.5] | 密 | 良好 | 淡灰色 | マメツ | |
| 22 | S K - 3 | 土師器・小皿 | 11.0 | 2.0 | | 密 | 良 | 淡黄白色 | ユビオサエ | |
| 23 | S K - 4 | 天目茶碗 | 12.0 | (5.2) | | 密 | 良好 | 暗褐色 | 鉄釉 | |
| 24 | S K - 5 | 常滑焼・鉢 | 32.0 | (10) | | 密 | 良 | 淡赤褐色 | ナデ、ユビオサエ | |
| 25 | S K - 5 | 中世陶器・甕 | | (15.5) | 13 | 密 | 良好 | 明灰色 | ナデ、ユビオサエ | |
| 26 | SB-2-2 | 銅錢 | 直径2.2、厚さ0.1 | | | | | 青銅色 | 洪武通宝 | |
| 27 | 表土 | 須恵器・环身 | | (2.2) | 12.2 | 密 | 良好 | 暗灰色 | ロクロナデ | |
| 28 | 表土 | 須恵器・环身 | 16.0 | (4.3) | | 密 | 良好 | 灰色 | ロクロナデ | |
| 29 | 表土 | 須恵器・环身 | 15.6 | 4.1 | 10.2 | 密 | 良好 | 灰色 | ロクロナデ、底はケズリ | |
| 30 | 表土 | 須恵器・环蓋 | 17.8 | 4.4 | | 密 | 良 | 明灰色 | ロクロナデ、一部ケズリ | |
| 31 | 表土 | 須恵器・环蓋 | 17.2 | (2.7) | | 密 | 良 | 淡灰色 | ロクロナデ、一部ケズリ | |
| 32 | 表土 | 須恵器・壺 | 18.0 | (7.0) | | 密 | 良好 | 明灰色 | ロクロナデ | |
| 13-33 | 表土 | 灰釉陶器・碗 | 15.2 | 5.1 | 7 | 密 | 良好 | 明灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 34 | 表土 | 灰釉陶器・碗 | | (3.0) | 5.4 | 密 | 良 | 明灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 35 | 表土 | 中世陶器・碗 | 14.4 | 5.0 | 7.4 | 密 | 良好 | 明灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |

※口径・器高・底径の単位はcm、()は残存値、[]は最大幅

| 遺物No | 層位・造構 | 種類・器種 | 口径 | 器高 | 底径等 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整等 | 備考 |
|-------|-------|--------|-----------------|--------|------|------|-------------|--------------|-------------|----|
| 36 | 表土 | 中世陶器・碗 | 11.0 | 4.0 | 6.2 | 密 | 良好 | 乳白色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 37 | 表土 | 中世陶器・碗 | 15.0 | (3.9) | 密 | 良 | 灰色 | ロクロナデ | | |
| 38 | 表土 | 中世陶器・碗 | 14.0 | (4.0) | やや密 | 良 | 淡黄灰色 | ロクロナデ | | |
| 39 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (2.7) | 7.2 | 密 | 良好 | 灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 40 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (2.9) | 6.4 | 密 | 良 | 灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 41 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (2.3) | 7.4 | 密 | 良好 | 灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 42 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (3.0) | 6.8 | 密 | やや良 | 淡茶色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 43 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (1.8) | 7.8 | やや密 | 良好 | 暗灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 44 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (4.1) | 7.8 | 密 | 良好 | 乳白色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 45 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (2.5) | 7.6 | 密 | 良好 | 乳白色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 46 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (2.2) | 7.4 | 密 | 不良 | 淡赤褐色 | ロクロナデ、底は不明 | |
| 47 | 表土 | 中世陶器・碗 | | (1.6) | 4.0 | 密 | 良好 | 灰色 | ロクロナデ、底は糸切り | |
| 48 | 表土 | 古瀬戸・壺 | | (17.4) | 10.0 | 密 | 良好 | 淡緑色 | 灰釉 | |
| 49 | 表土 | 古瀬戸・鉢皿 | 15.0 | 3.2 | 7.4 | 密 | 良好 | 淡茶色 | 内面は目立、底は糸切り | |
| 50 | 表土 | 近世陶器・蓋 | 9.6 | 1.9 | 密 | 良好 | 青灰色 | ロクロナデ、一部ケズリ | | |
| 51 | 表土 | 常滑焼・甕 | | | 密 | 良好 | 赤茶色 | ロクロナデ | | |
| 52 | 表土 | 甕 | | | 密 | 良好 | 灰白色 | ナデ | | |
| 53 | 表土 | 土師器・壺 | | (3.5) | 密 | 良好 | 淡褐色 | ハケメ | | |
| 54 | 表土 | 土師器・甕 | 16.4 | (5.0) | 密 | 良好 | 淡褐色 | 外面ナデ、内面ハケメ | | |
| 55 | 表土 | 土師器・甕 | 25.8 | (6.3) | 粗 | 良 | 淡茶褐色 | ナデ | | |
| 56 | 表土 | 土師器・甕 | 28.0 | (5.3) | やや粗 | 良 | 黒褐色 | 外面ナデ、内面板ナデ | | |
| 14-57 | 表土 | 土師器・鍋 | 24.0 | (5.0) | 密 | 良好 | 赤褐色 | 外面ナデ、内面ハケメ | | |
| 58 | 表土 | 土師器・小皿 | 8.0 | 1.4 | 密 | 良 | 乳白色 | 外面ユビオサエ、内面ナデ | | |
| 59 | カクラン | 土師器・小皿 | 9.2 | 2.0 | 密 | 良 | 淡褐色 | ナデ | 穿孔あり | |
| 60 | 表土 | 土師器・小皿 | 10.4 | 1.8 | 密 | 良好 | 淡黄褐色 | 外面ユビオサエ、内面ナデ | | |
| 61 | 表土 | 丸瓦 | 幅(10.6)、長(19.7) | 密 | 良好 | 淡赤褐色 | 外面ナデ、内面布目压痕 | | | |
| 62 | 表土 | 製塙土器 | (4.3) | [2.0] | 密 | 良好 | 赤褐色 | ナデ | | |
| 63 | 表土 | 製塙土器 | (4.2) | [2.0] | 密 | 良好 | 淡褐色 | ナデ | | |
| 64 | 表土 | 土鍤 | 3.5 | 1.0 | 密 | 良 | 淡褐色 | ナデ? | | |
| 65 | 表土 | 貝輪 | 7.2 | [2.2] | | | 白色 | 未完成品 | | |
| 66 | 表土 | 剝片 | 2.8 | [1.1] | | | 黒色 | 石材は黒曜石 | | |
| 17-1 | G-1 | 須恵器・环身 | | | 密 | 良好 | 青灰色 | ロクロナデ | | |
| 2 | G-1 | 須恵器・甕 | | | 密 | 良好 | 灰色 | 外面タタキ、内面同心円文 | | |
| 3 | G-1 | 中世陶器・碗 | | | 密 | 良好 | 淡灰色 | ナデ | | |
| 4 | G-1 | 天目茶碗 | | | 密 | 良好 | 黒褐色 | 鉄釉 | | |
| 5 | G-2 | 製塙土器 | (6.5) | [2.5] | 密 | 良好 | 淡赤褐色 | ナデ? | | |

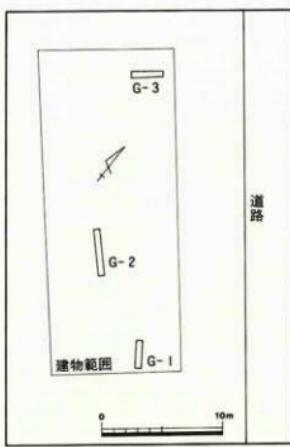
※口径・器高・底径の単位はcm、() は残存値、[] は最大幅

第5章 試掘調査

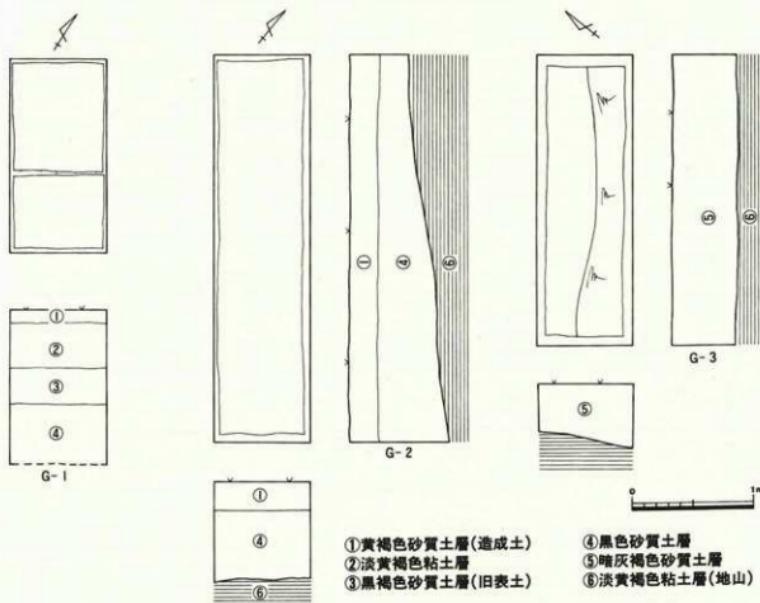
試掘調査は、建物建設範囲内について行った。各グリッドは幅1mを原則として任意の規模で3ヶ所設定した。各グリッドの配置は第15図のとおりである。この章ではグリッドごとに層位・遺構の説明を行い、出土遺物の詳細についてもグリッドごとに説明する。試掘調査の目的は、遺跡の範囲確認である。このため平成3年度調査のSD-1中に位置するG-1については壁崩落の危険があるため遺物が確認された時点まで止め、それ以下は掘り下げて調査を行っていない。なお、本文中の丸数字はグリッド断面図の土層番号に、遺物の()番号は遺物図版番号にそれぞれ対応する。

G-1 (第16図)

G-1は、建物範囲内の南西端に設定した $2 \times 1\text{m}$ の規模のグリッドである。調査ではSD-1の中であることが確認



第15図 試掘調査グリッド位置図 (1/400)



第16図 試掘調査グリッド平面図・断面図 (1/50)

されたため地山面まで掘り下げていない。

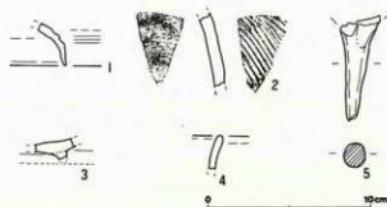
層位と遺構

地表より厚さ約12cmの造成土（黄褐色砂質土層①）があり、その下には地山土と同質の淡黄褐色粘土層②が厚さ約46cmで再堆積していた。①②は最近に造成された埋土である。②の下には旧表土と思われる黒褐色砂質土層③が約38cmの厚さで堆積していた。この層

下にはSD-1の埋土である黒色砂質土層④があり、縦1m、横80cmの範囲を約60cm掘り下げた段階で調査を終えた。

出土遺物（第17図1～4）

遺物は②③層中から出土しているが、④層からは出土していない。（1）は須恵器の壺蓋の口縁部破片であり、古墳時代後期のものと推定される。（2）は須恵器の甕の胸部破片であり、外面には叩き目が、内面には同心円文がみられる。（3）は中世陶器の碗の底部破片である。高台端部も欠損している。（4）は天目茶碗の口縁部破片であると考えられ、鉄軸が施されている。



第17図 試堀調査出土遺物（1／3）

G-2（第16図）

G-2は、建物建設範囲内のほぼ中央部に設定した4×1mの規模のグリッドである。

層位と遺構

地表より厚さ約30cmの造成土（黄褐色砂質土層①）があり、その下にはSD-1の埋土である黒色砂質土層④が堆積していた。グリッドの位置は丁度SD-1の溝斜面にあたり、厚さ約30~70cmの範囲で堆積している。④層の下には地山（淡黄褐色粘土層⑥）が検出された。

出土遺物（第17図5）

遺物は①と④層の境目から製塙土器が1個体だけ出土している。（5）は製塙土器の上部と先端部を欠損した脚部破片である。ナデ調整によって丁寧に整形されている。

G-3（第16図）

G-3は、建物建設範囲内のほぼ北端部に設定した3×1mの規模のグリッドである。台地の端部に位置する。

層位と遺構

地表より厚さ最大約66cmの暗灰褐色砂質土層⑤があり、その下には地山（淡黄褐色粘土層）⑥が検出された。地山はグリット東半分が平坦面で、西半分は緩やかに落ち込んでいた。G-3南西付近の台地が大きく削平されている。このことより、G-3付近は以前存在していた厩舎の建設時に削平されたものと思われた。

出土遺物

遺物は全く出土していない。

第6章 まとめ

今回の調査で、波入江遺跡は古墳時代後期から近世にかけて続く、海浜部集落であることが明らかになった。また、性格の不明な溝も検出されている。ここでは、検出された遺構や遺物を検討し、遺跡の性格を簡単にまとめてみる。

検出された遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝、井戸、土壙等があるが、伴出する遺物が殆どないため大半の帰属時期は不明である。竪穴住居址のSB-1・2は出土する須恵器の形態から、両者とも東三河地域の須恵器編年（註1）の第Ⅳ期中葉（7世紀中葉）に比定される。これらの竪穴住居址は竈を建物北側の中央部に築いており建物自体も古地斜面の中腹に位置するなど、海風（西風）や冬の季節風（北西風）に対処して建てられたものと思われる。

掘立柱建物址（SB-3～5）は3棟が重複して検出されている。柱穴からの遺物は殆どなく、帰属時期については不明な点が多いが、SB-3の柱穴No.2から明代の洪武元年（1368年）に製造された洪武通宝のびた銭が出土している。天正～元禄期に多く私鉄されており、14世紀中葉以降の建物であることは間違いないが、3棟重複している点より継続的に14世紀中葉～18世紀頃の間に建てられたものと思われる。この場合、隣接する井戸（SE-1）から出土している井戸廐絶段階の土師器鍋や皿が15世紀後半から16世紀前半のものであるため、15世紀を中心とした時期と考えられよう。

遺物の出土している土壤で、時期の判るものは、SK-1が7世紀前葉、SK-2は製塩土器の脚部の形態より9世紀頃、SK-3は15～16世紀代、SK-4は15世紀後半、SK-5は16世紀代と思われる。

次に、性格の不明な大きな溝（SD-1）であるが、規模は人為的かまたは自然な落ち込み（谷地形）か判断が困難な傾斜角12°の落ち込みで、規模は幅10m以上、深さ約2mで、北西方向から西北西へ屈曲し、試掘調査で確認できた部分も含めると約70m以上に伸びるものである。落ち込みの底部に更に掘られた溝は幅1.24m、深さ0.65mで、掘り直しがされていることから長期的な使用が考えられる。遺物は落ち込み上部から掘り込み等に起因する中世陶器等が若干混在して出土したが、その他では溝下部から縄文土器が僅かに出土しているに過ぎない。この縄文土器は縄文時代晩期の無文の粗製深鉢である可能性が高いものである。またSD-1埋没後にSB-1が建てられたことは断面切り合いで確認されており、7世紀前葉までには確実に埋まっていた。これらのことから、このSD-1の帰属時期を考えると、縄文時代にこれだけの溝が掘られるとは考え難く、弥生時代から7世紀前葉の間に掘られたものと考えられるが、正確な時期の比定はできない。

ところで溝の性格についてだが、溝が巡る場合は環濠とともに考えられる。しかし環濠とした場合、溝中に遺物が全く無い点は不可解である。一方、自然の谷地形に作った排水用の溝とも考えられるが、いずれにせよ、溝に伴う時期の建物址は検出されていない。また、溝自体の平面形も不明なため性格を断定するほどの資料が整っていないといえる。

次に、調査で出土した遺物について簡単にまとめてみよう。縄文時代の遺物としては、溝中の縄文土器と剝片石器、また貝輪の未製品が挙げられる。出土量自体は極めて少ないが、剝片や貝輪の未製

品が出土している点から、小規模なキャンプサイト的な住居が存在していた可能性は高い。

次の弥生時代では遺物は全く出土していない。古墳時代の遺物も竪穴住居址が存在している古墳時代後期以外の遺物は出ていない。古代になると、8～9世紀頃の須恵器が僅かであるがみられ、10世紀代の灰釉陶器も少量ながら出土している。中世の遺物では12～13世紀の中世陶器碗が比較的まとまってみられ、15～16世紀代の古漁戸や常滑、または土師器鍋・皿が出土している。近世の遺物は殆どみられなかった。

採集された資料のうち、特筆されるものに製塙土器があげられる。従来は渥美半島の先端部に集中し、最奥部の豊川河口部周辺では余り知られていないかった。しかし近年の調査で、豊橋市波入江遺跡を始め、城戸中遺跡、市道遺跡のような海浜部の遺跡や一ノ木遺跡、玉川変電所遺跡、嵩山蛇穴遺跡のような現海岸線から10kmほど入った内陸部の遺跡でも見つかり、増加傾向にある。ただ、これらの遺跡からは製塙土器の脚部が少量出土するのみで、渥美半島先端部のように土器が集中投棄された地点や大規模な製塙炉は見つかっておらず、本格的な土器製塙が行われていたかは不明である。

また、立地を反映して土錐も見つかっているが量は極めて少なく、その他の漁具は見つかっていない。もう一つ興味深いのは布目瓦が1点であるが出土している点である。この地区周辺に古代において瓦葺きの建物があった可能性を示す例といえよう。

ところで、平成元年に伊藤氏が調査した波入江207貝塚（註2）の成果と今回の調査結果を比較すると、伊藤氏調査では、平安時代後期の貝層が確認され、鐵津等の製鉄を行ったことを示す遺物が出土しているのに対し、今回の調査ではこれらのものは出土していない。また、伊藤氏調査が平安時代を中心とした遺物に対し、古墳時代～中世が主体というように内容が若干異なっているといえよう。これは、遺跡の地点差によるものと思われる。

以上が今回の調査で判明したことである。これらの遺物が示すように、波入江遺跡は7世紀～16世紀頃にかけて継続あるいは断続的に営まれていた集落址であったといえる。今回の波入江遺跡の調査は、海浜部の集落の様相を示す好例であるといえよう。

註1 小林久彦 「第4章第1節 東三河における古墳出土須恵器の編年」 『三河考古第6号 東三河の横穴式石室 資料編』 1994

註2 伊藤 恵 「4古代・中世老津の発掘」 『郷土誌 老津』 豊橋市立老津小学校 1990

報告書抄録

| フリガナ | ナミイリエイセキ | | | | | | | |
|---------------|---|----------------|---------------------------------------|-------------------------------------|--------------------|------------------------------------|------------------------|------|
| 書名 | 波入江遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 豊橋市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第22集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 岩瀬彰利 | | | | | | | |
| 編集機関 | 豊橋市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒440 愛知県豊橋市向山大池町20-1(豊橋市民文化会館内) TEL. 0532-61-5111 | | | | | | | |
| 発行年 | 西暦1994年12月25日 | | | | | | | |
| フリガナ 所収遺跡名 | フリガナ 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ナミイリエ 波入江 | トヨハシ オイチヨウ 豊橋市老津町 アザナミイエ 字波入江 | 23201 | 79605 | 34° 42' 13" | 137° 22' 25" | 19890809~ 19890904、 19930808 | 600 | 宅地造成 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| ナミイリエ 波入江 | 集落址 | 古墳 古代 中世 | 竪穴住居址 2 掘立柱建物址 3 溝 井戸 土壤等 | 須恵器、灰釉陶器、 中世陶器、製塙土器、 土師器、布目瓦等 | | | | |

写 真 図 版



1. 波入江遺跡調査区全景（北西から）



2. 5B-1 全景（北西から）

写真図版 2



1. SB-2 全景（北から）



2. SD-1 南壁付近（西から）

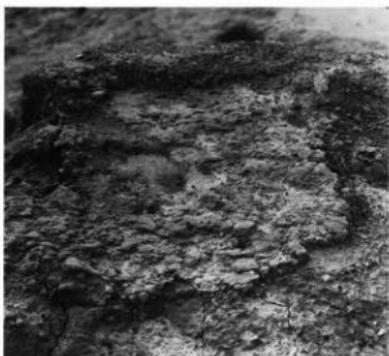
写真図版3



1. SB-1 考古遺跡（南から）



2. SB-2 考古遺跡（北から）



3. 地床炉（南東から）



4. SB-1・SD-1 切り合い断面（北から）

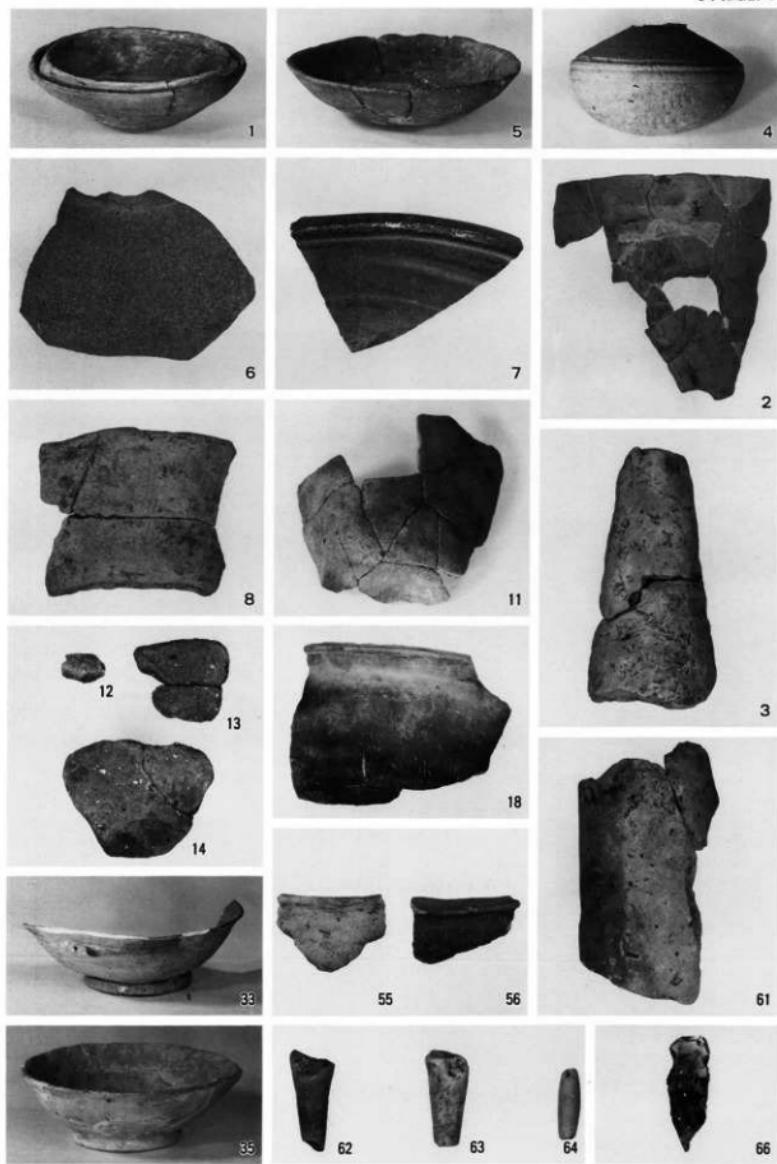


5. SB-2 須恵器出土状況（東から）



6. SB-2 土師器出土状況（東から）

写真図版 4



出土遺物

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第22集

波入江遺跡

平成6年12月25日

発行 豊橋市教育委員会◎

文化振興課

(豊橋市民文化会館)

〒440 豊橋市向山大池町20-1

印刷 豊橋印刷社